

ニホンザルの剥製



さまざまな野生動物に人気の柿



「なぜ猿は柿を投げるのか」

今宵は…

物は地域や時代によって多少異なるようですが、要は悪いことをすると最終的に自分に返ってくることを、弱い者でも力を合わせれば強者に勝てることなどの教訓を私たちに教えてくれています。

生態学的に考える

さるかに合戦

「ほっとやまはく」
タイム⑦⑥



皆さん一度はこの話を聞いたことがあるでしょう。おにぎりを持つていたカニに、サルは柿の種との交換を持ち掛けた。「おにぎりは食べてしまえば無くなるが、柿は植えればその後ずっと実を食べられる」と。物々交換をしたカニは、早速柿の種子を植えた。時がたち、柿が実るようになると、サルが再び現れ、木に登れないカニの代わりに柿を取ってあげると申し出た。しかしサルは熟した甘い柿を自分で食べ始め、カニが催促すると、硬く青い柿をカニに投げ付けた。柿が当たったカニは死んでしまう。これに怒ったカニの子どもたちが仲間と共に敵討ちを行うストーリーです。内容や登場人

さて今回注目するのは、サルが柿を投げるという点です。実は本当は青い状態では渋くて食べられないのは皆さんご存じでしょう。これは果肉の中の種子がまだ成熟していないので、動物に食べられないように渋みで果実を守っているためです。この渋みはタンニンという被食防御物質です。タンニンは動物の消化管の中でタンパク質と結合し、強固な複合体を形成します。動物はこのタンニン・タンパク質複合体を分解することができません。そのため、タンニンを一度に大量に摂取してしまうと、動物はタンパク質消化率の低下や消化管の粘膜の損傷、腎臓の機能不全などのダメージを受けてしまいます。種子が成熟すると、植物側は動物に果実を食べて種を

運んでもらうために、タンニンを難溶化させ、渋みを感じなくさせます。そこでサルはタンニンをとりすぎないように、まずは一口かじって味見をし、渋かったらポイッと放り投げます。これを何度も繰り返し、本当に甘い柿だけを食べる非常にぜいたくな食べ方をします。これこそが「猿が柿を投げる」の元ネタです。本当にカニに当たったかはさておき、この話の原作者はよく猿を観察していたのだと私は思います。

生態学的に考察すると、サルの柿の食べ方は理にかなっていて、被食防御物質の摂取を最小限に抑え、単位時間当たりの摂取エネルギーを最大にすることが出来ます。つまり、サルは意地悪で柿を投げ付けたわけではないのですが、この食べ方はどこかひんしゆくを買ってしまうような行動ですよね。サルによる被害を受けた柿農家さんが怒るのも当然です。一方で、この行動の恩恵を受けている動物もいます。シカは、木に登れないため、口が届く高さの木の実はか食べられません。サ

ルが樹上の木の実を落としてくれることで、普段食べられない実を採食することが出来ます。一部の地域ではシカがサルの群れの後を地上から追い掛けることがあります。これを「落ち穂拾い」行動と言います。シカにとってサルは食べ物を地上に落としてくれるありがたい存在です。サルの行動は一見すると迷惑な話ですが、実は誰かの役に立っている場合もあります。

今回はさるかに合戦を生態学的に考察してみました。ぜひ動物園に行って、サルの餌の食べ方をよく見てみてください。彼らはリンゴやイモを最初は頬袋（ほほぶくろ）に詰め込みますが、安心できる場所を取り出し、必ずかじりながら食べることでしょう（飼育施設で餌として与えるものは比較的十分熟しているのです、あまり投げません）。ようやく長い夏が終わり、実りの秋になりました。食卓に柿が並んだ際は、甘い実を味わいながら、シカ目線でのサルの柿投げ行動を描いた物語を考えてみてはいかがでしょうか。

大森鑑能（専門学芸員・動物）
▽次回は11月13日です。

山口県立山口博物館
TEL 083-922-0294
月曜休館（祝日の場合は翌日）。最新情報はホームページで。

